

大阪大学 GC0E プログラム「コンフリクトの人文学」RF

「横断するポピュラー・カルチャー」

2008 年度活動報告資料(2009. 4. 18)

報告：富山一郎・古川岳志・久保田美生

1. メンバー一覧 (2008 年度)

2. 「ポピュラー・カルチャーと社会的コンフリクトの総合的研究」について

プロジェクト代表 富山一郎

3. 活動報告

3-1. 定例ゼミ

3-2. 研究交流ワークショップ

3-3. シンポジウム・講演会・研究会等

3-4. 「国際現代文化研究ハブ」との共同開催事業

3-5. 研究会・読書会

4. 活動業績

横断するポピュラーカルチャー

web: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/crossing-popularculture/>

お問い合わせ: crossing-popularculture@let.osaka-u.ac.jp

【1. メンバー一覧】

2008 年度

プロジェクト代表

富山一郎 大阪大学文学研究科准教授

企画実行スタッフ・連携研究者

金水敏 大阪大学文学研究科教授／大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長

辻大介 大阪大学人間科学研究科准教授

古川岳志 GCOE 特任助教

久保田美生 GCOE 特任助教

東園子 GCOE リサーチ・アシスタント（大阪大学人間科学研究科博士後期課程）

上地美和 GCOE リサーチ・アシスタント（大阪大学文学研究科博士後期課程）

真鍋昌賢 大阪大学文学研究科助教

吉澤弥生 GCOE 特任研究員

渡邊太 大阪大学人間科学研究科助教

太田健二 大阪大学人間科学研究科特任助教

永岡崇 大阪大学文学研究科博士後期課程

藤田智博 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

久保田裕之 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

川村邦光 大阪大学文学研究科教授

荻野美穂 大阪大学文学研究科教授

北原恵 大阪大学文学研究科教授

堀江有里 エイズ予防財団リサーチ・レジデント

伊藤公雄 京都大学文学研究科教授

山中千恵 仁愛大学人間学部講師

吉村和真 京都精華大学マンガ学部准教授

表智之 京都国際マンガミュージアム研究員

伊藤遊 京都国際マンガミュージアム研究員

小倉利丸 富山大学経済学部教授

Alison Tokita モナッシュ大学准教授

崎山政毅 立命館大学文学部総合人文学専修准教授

【2. 「ポピュラー・カルチャーと社会的コンフリクトの総合的研究」について】

2009年4月18日

富山一郎（代表）

I はじめに

複数の学問分野、大学外で活動する人たちとともに行なってきた「ポピュラー・カルチャーと社会的コンフリクトの総合的研究」において、現時点で見えてきたポピュラー・カルチャーを考えるための見取り図を、以下に示すと共に、これまでの活動内容を報告する。

制度化、あるいは規範化され、秩序を獲得した集団に対して、ポピュラー・カルチャーが媒介する集団性（いまそれをポピュラーなるものとよんでおく）は、境界が不定形であり、その展開も無意識的、偶然的である。ある意味こうしたところのなさを問題にすることが、本プロジェクトの出発点に他ならない。考えるべき具体的事象としては、アニメやマンガ、あるいはポピュラー音楽やインターネットを媒介にした集まり、ファンやゴスロリなどのファッション、あるいは新宗教運動や新しい社会運動など、多岐にわたる。また単に今日の現象だけではなく、従来、民衆文化あるいは民衆運動とよばれてきた事象においても、同様の傾向を議論することは出来るだろう。だが個々の事象をめぐる検討は、あまりにも多岐にわたるので、ここではふれない（資料を参照）。本プロジェクトでは、こうした具体的事象に対する検討を深める一方で、今述べた「ポピュラーなるもの」が、制度化され境界が明示された集団と、どのような関係を生み出すのかということに焦点を当てている。

II 横断性

不定形で無意識的な展開を示すこの集団性は、その性格からして従来の集団の境界に対して横断的である¹。あるいは集団間の対立を乗り越えていくような展開を示す場合が多い。ではこのポピュラーなるもの動きは、集団間のコンフリクトが解消され、新たな集団の形成に向かうのだろうか。問題の一つの焦点はここにある。すなわち対立が、調整され、和解がなされ、解消され、新たな集団や制度が誕生するというプロセスとは異なるコンフリクトに対する認識が、この横断性という言葉には込められている。すなわち、対立を横断するポピュラーなるものを、どこまでも対立を調停し、和解を促しコンフリクトを解消する制度とは異なるものとして、私

¹ このような横断性や集団理解は、既に様々な領域で議論され分析されていることではある。が、ここではフェリックス・ガタリがいう構造化された集団と機械状に広がる集団を念頭においており、ポピュラーなるものは後者にあたる。また横断とは構造化された集団間の境界をまたぐことではなく、たとえそう見えたとしても、そこには構造化を支える無意識的前提の顕在化、意味化が伴うのである。そしてこうした設定においては、集団に秩序を与える制度とは、暴力的禁止を前提とする法だけではなく、言語の象徴的秩序も含まれることになる。ポピュラーなるものが無意識的性格を持つというのは、かかる点にかかっており、感覚的に表現するなら、「知らずしらずに群れてしまう」ということが、一つの重要なポイントになる。ガタリ『精神分析と横断性』。

たちは考えてきた。更にいえばこの違いが新たなコンフリクトを生み出すと考える。いいかえれば、コンフリクトを横断することと、このポピュラーなるものがもつ集団性が規範化され制度化された集団と新たなコンフリクトを生成させていくということが、横断性という言葉には込められている。またこの新たなコンフリクトは、ある集団性を前提した集団間の対立というより、集団性をめぐる対立とでもいうべきものである²。

もちろん横断性は、既存の制度と密接にかかわったり、あるいは新たな制度に結びつくかも知れない。その時ポピュラーなるものは、こうした制度を支える集合的心性になるだろう。だがそこに収まりきれない動きを、横断性はいつも確保しているといえる。いいかえればそこでは、制度化をめぐる抗争が不断に展開し、その抗争が新たな集団間の対立として登場するかもしれない。だがその際も、横断性は、集団間の対立に解消されることはない。ここに、横断性においてコンフリクトを考える基本的立場がある。すなわち、対立は、対立を超える普遍的基準（それは時には近代合理性かもしれないが）にもとづいて構築される制度において解消されるのではなく、対立は横断され、横断において新たなコンフリクトが生み出され、それが集団間の対立へと展開する一歩手前でまた横断されていくのであり、こうした運動性こそが横断性のポイントなのである。またあえて公共性といういい方をすれば、それは近代合理性を前提にして設計された社会政策的公的制度ではなく、運動において目指され、たえず乗り越えられ、不確定な外部へ拡張されていくという意味での公的なものといういいかたも、出来るかもしれない。

本プロジェクトではこうした横断性を、ポピュラー・カルチャーを考える基軸においた。そして、こうした運動を、あるいは横断性を分析するとはどういうことなのか。言語の象徴的秩序をかいぐりながら横断していくポピュラーなるものを、いかに語るのか。研究者の学的言語は、あるいはその言語において形成される研究集団という秩序は、このポピュラーなるものに感染していないのか。こうした問いが、横断性という設定の背後に生まれることも、ごまかさないで考えておきたい。

Ⅲ 新たなコンフリクト

一つの重要な問題は、横断性と共に生まれる「新たなコンフリクト」である。さきほども述べたように、様々な集団間を横断するポピュラーなるものは、新たな集団性を生み出し、それが新たなコンフリクトを生み出す。だがそれが、何かの制度にいきつくことはない。いいかえれば、この新たなコンフリクトは、未決の未来に開かれ続けている。たとえば近年の反グローバルイズムの運動や、生活不安を抱え込むプレカリアートの運動の集合性にポピュラーなるものが多く入り込んでいる。あえて違いを述べれば、党に象徴される目的意識性において組織化された運動体ではなく、不定形で無意識的な集合性がそこにはある³。そのことは、こうした運動

² この点は、資料に記載されているディスカッションペーパー、辻大介「ポピュラーなるものと、公的なもののコンフリクト」でも議論されている。

³ それは、別紙資料にあるワークショップにおける小倉利丸「文化における違法と表現の自由」

が、格差を是正する制度や、社会政策的法をたたき出したとしても、こうした制度や法には解消されず、そこで終わることのないプロセスを展開し続けることを、暗示している。コンフリクトを未決の未来を開き続けるプロセスに置き続けることが、この新たなコンフリクトを考える際の要点になる。

また新たなコンフリクトは、終わったかに見える運動、解消したかに見えるコンフリクトを、別の形で新たに発見することとして登場するかもしれない。集団間の対立が、何らかの和解を経て、一つの制度になる。前述したように、こうした動きの中で境界を超えるポピュラーなるものは、対立解消と制度化を支える集団性を準備するだろう。だがくりかえすが、そこに収まりきれない動きを、横断性はいつも確保している。すでに解決し終わったかに見えるコンフリクトを、ポピュラー・カルチャーの文脈において新たに見出すということが、やはりあるのだ。それは、対立を超えて共有されたポピュラーなるものが、まさしく共有されたその地平において、深い亀裂を抱え込むとでもいうべき展開である。かつての植民地支配の歴史を軽々と超えて共有されるポピュラー・カルチャーに、「在日」の歴史の深い悲しみや怒りを見出すことは、たんなる過去の対立の残存ということではない。まさしく同じ歌を歌いながら、同じ言葉を語りながら見出される亀裂である⁴。それはポピュラーなるものにおいて、事後的に発見される歴史性とともいうべき新たなコンフリクトである。横断するポピュラー・カルチャーの分析は、確定されない未来と、終わらない過去をポピュラーなるものに発見するのである。

Ⅲとりくまれてきた二つ、そして三つ目の課題

以上のような本プロジェクトで見えてきたこうした見取り図を念頭におきながら、これまでの活動をふり返り、要約すれば、取り組まれてきた課題を次のように整理することが出来るだろう。

- (1) ポピュラーなるものの集団性とは何か、横断性とは何か。
- (2) 横断性が生み出す「新たなコンフリクト」とは何か。

これまで、様々な具体的事例をもとにこうした課題に取り組んできた。本プロジェクトでの副題は、「文化とは誰のものか」であるが、それはこうした二つの課題を包含している。あえていえば所有格が不断に拒否される事態を、私たちはつねに念頭においているのだ。具体的活動内容については資料をみていただきたいが、こうした課題に加え、コンフリクトが解消していくかのように見えるポピュラーなるものに新たなコンフリクトを発見する営みとしての研究行為それ自体についても、私たちは討議をしてきた。すなわち、ポピュラーなるものが新たなコンフリクトとして登場する際の、いわば構成要素として活動する研究行為の問題であり、新た

の中心課題である。

⁴ この点は、資料にある朴一氏講演「日本の大衆文化と在日コリアン」で議論された。

なコンフリクトの登場にコミットし続ける研究とでもいうべき論点である⁵。あるいは、構造化された集団を横断するポピュラーなるものの運動に、終わらない過去と、未決の未来を発見し続けるような研究行為についてである。新たなコンフリクトという設定には、研究行為自体への問いも含まれている。

元来、ポピュラー・カルチャーと呼ばれる領域には、たとえば「思想の科学」研究会など、広い意味での研究会活動が伴っていた。また近年の反グローバリズム運動に対する分析作業は、当該運動との密接な関係性のもとで遂行されている⁶。本プロジェクトは、こうした論点についても議論し、新たなコンフリクトの生成にコミットする研究のありかた、研究組織のありかたなどについても検討してきた⁷。それは、いわばポピュラーなるものに関わって、研究行為の新しい組織化の試みであり、研究にかかわる制度の批判的検討である。そして、もちろんそこには大学という制度も含まれる。したがって三つ目の課題として、新たなコンフリクトとに關与する研究組織の検討、あるいは研究が横断性を生み出し続けるというその遂行的側面の検討が浮かびあがる⁸。それは、思ってもみない関係性を生み出し、媒介していく、技術（アート）としての知という問題なのかもしれない。

（３）研究組織の検討

以上のような課題を取り組むための、組織の構築と活動をおこなってきた。組織はメンバーにあるように、多方面に及ぶが、同時に他の大学院生をも含む非常に数多くの大学院生とともに活動している。とりわけ文学研究科の日本学と人間科学研究科のコミュニケーション論に所属する院生の双方を巻き込みながら、活動してきた。またこうした講座を越えたつながりを媒

⁵ たとえば資料にある川村邦光・渡邊太によるオウム真理教をめぐるワークショップは、一見犯罪として区分けできているオウム真理教に「横断するポピュラー・カルト」を発見する作業であり、それにより犯罪集団/非犯罪的市民ではなく、様々な社会運動とオウムとの重なりが見出された。すなわち、横断性においてオウム真理教を議論することは別のコンフリクトの発見、運動の発見でもあった。

⁶ こうした問題は、プロジェクト「文化芸術の公共性と社会的コンフリクトの研究」（吉澤弥生代表）が中心となって行なったフランコ・ベラルディ氏をかこむワークショップで討議された。同ワークショップの記録DVDの後半に登場するベラルディ氏の、「ネグリを読むのもいいが、なにかしようじゃないか」という熱いアジを、是非ご覧になっていただきたい。

⁷ それは、資料にある第一回研究交流ワークショップの主要なテーマである。

⁸ あえていえば、こうした設定は別に目新しいことではない。思っても見なかった関係を作り上げつづける分析行為としての精神分析学からガタリが見出した制度論的精神療法もそうだし、宗教それ自身と宗教学の関係も広い意味で関係する（この点は資料にある永岡崇のディスカッションペーパー「協労表象のためのノートー教祖をめぐる読みの共同体を意識化する」でも検討された。また横ボゼミでは、具体的事例について、かかる論点はいつも議論されている）。ようするに、さまざまところで問われてきた問題であり、こうした既に気づかれながらも、主題として明示されなかった論点を様々な学問分野から持ち寄り、つき合わせていく作業も、私たちのプロジェクトの課題である。

介するハブとして、前21世紀COEのネットワークを引き継いだ「国際現代文化研究ハブ」が存在する。本プロジェクトは、こうしたハブの活動とも重なっている。またNPO関係者、出版関係者なども討議者としてネットワークに参加している。こうした立体的に広がった星雲上の組織を実際の活動として展開するために、以下の三つの形態をとっている。

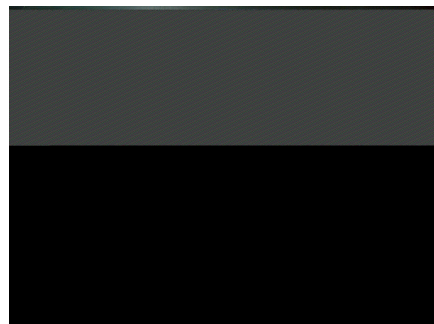
- (1) 研究会組織
- (2) 新たな討議空間の創造
- (3) 情報集約、発信のためのウェブ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/crossing-popularculture/>)

(1) は横断するポピュラーカルチャーゼミ（通称横ポゼミ）ということで、定期的に行なっている。またそれに付随して、院生を中心に同プロジェクトにかかわる複数の読書会が、豊中地区、吹田地区双方において同時並行的に展開している。(2) は、ポピュラーなるものにかかわる様々な人と共に設定する討議空間の構築であり、課題の三つ目の、研究組織の検討、あるいは技術（アート）としての知を検討する場でもある⁹。(3) はおもにこうした二つの活動をサポートしまたそこでの成果を蓄積する場であり、同時に二つの活動をつなぎとめる場所でもある。横断性を分析すること、そして横断性を生み出すこと。この両者を、緊張感を持ってギリギリまで着き合わせていくこと。これが本プロジェクトの活動内容の軸である。詳しくは、添付の資料を参照されたい。また集約として、この二つの活動を軸に、論文集の出版を現在検討している。

⁹ こうした試みとして、美術家の小山田徹さん、焙煎家の大宅稔さんとともにおこなったプロジェクト「ちっちゃい火を囲むー共有空間の実験」がある。そこでは、研究者や院生、留学生、NPO関係者のみならず、大学で働く人々や、非正規雇用の人々、豊中地区の住民なども参加した。その意味については、現在報告パンフレットを作成中である。

【3-1. 定例ゼミ】

「横断するポピュラーカルチャー」グループでは＜横ポゼミ＞として、継続的に研究会を開催している。連携研究者・リサーチアシスタントを中心に毎回15名程度が参加し、相互に研究報告を行いながら、「文化とは誰のものか」という共同テーマを軸に議論を行っている。研究報告と討議の活動を促進するためのシステムとして、報告については発表者が事前にML（メーリングリスト）へディスカッションペーパーを提出し、ゼミ当日は討議マップを用いている。また、ディスカッションペーパーや議論内容をデジタル記録し、webを用いてアーカイブを行っている。



2008 年度ゼミ開催一覧

第一回 2008 年 6 月 7 日（土） 担当 吉澤弥生（GCOE 特任研究員）

「メディアのオルタナティブ／ビフォ氏の活動について」

第二回 2008 年 7 月 2 日（水） 担当 古川岳志（GCOE 特任助教）

「ポピュラーカルチャーとしての公営ギャンブルについて」

第三回 2008 年 8 月 1 日（金） 担当 久保田美生（GCOE 特任助教）

ゲスト 森 宣雄（聖トマス大学文学部准教授）

「前 COE『インターフェイスの人文科学』での若手研究集合（異分野間共同研究）の実例について」

第四回 2008 年 8 月 27 日（水） 担当 辻大介（人間科学研究科准教授）

「ポピュラーなものと公的なもののコンフリクト～コミュニケーション社会学の立場から考える」

第五回 2008 年 10 月 29 日（水） 担当 久保田裕之（人間科学研究科博士後期課程）

「反植民地運動としての居住運動」

第六回 2008 年 11 月 12 日（水） 担当 太田健二（人間科学研究科特任助教）

「クラブカルチャーの文化社会学的考察 DJ が Mix するように人をつなぐ、そのための空間利用」

第七回 2009 年 1 月 21 日（水） 担当 永岡 崇（文学研究科博士後期課程）

「協働表象のためのノート 教祖をめぐる読みの共同体を意識化する」

【3-2. 研究交流ワークショップ】

第一回：2008 年 3 月 8 日 「ポピュラーカルチャーとコンフリクト」

[セッション1：対象としてのポピュラーカルチャー：ポピュラーカルチャーと学問が会おうとき]

真鍋昌賢（大阪大学助教）「『客』はいかにして可視化できるのかー 芸能の受容史・試論ー」

田中東子（大学非常勤講師）「Girl meets the Political:ポピュラー文化の中に浸透するフェミニスト思想」

吉村和真（京都精華大学准教授）「『マンガの影響』を問い直す_マンガリテラシーの習得過程」

コメンテーター：富山一郎（大阪大学准教授）

コーディネーター・司会：東園子（GCOE リサーチ・アシスタント）

[セッション2：関係としてのポピュラーカルチャー：社会運動と文化表現]

成定洋子（中京大学非常勤講師）「運動と労働の間で 女性センターの場合」

鳥山淳（琉球大学非常勤講師）「沖縄の歴史経験を記録する場から、文化と労働を考える」

コメンテーター：藤井たけし（失業者／歴史問題研究所研究員）

コーディネーター・司会：上地美和（GCOE リサーチ・アシスタント）

[セッション3：全体討論]

久保田美生（GCOE 特任助教）「大学と『その外部』のコラボレーションから何をつくるか」

金友子（きむ・うじゃ）（立命館大学国際言語文化研究所客員研究員）「立ち止まって考えること、歩きながら考えること」

討論者：金水敏（大阪大学教授）、伊藤公雄（京都大学教授）他、参加者全員

コーディネーター・司会：古川岳志（GCOE 特任助教）

第二回：2009 年 3 月 14 日「横断するポピュラーカルチャー」

[セッション1：研究発表と討論]

渡邊太（大阪大学）「横断するポピュラー・カルト スピリチュアル理性批判」

沈正明（大阪大学大学院文学研究科）「愉快的 1930 年代の表象」

[セッション2：研究発表と討論]

水野麗（秋田工業高等専門学校）「消費社会の中のゴシックロリィタ」

まえがわ まさな（台湾・致遠管理学院）「ゴスロリはどこにいる 現代文化流行の虚像と実像・台湾との 比較を通して」

[セッション3：研究発表と討論]

石山祥子（大阪大学大学院文学研究科）「〈農民芸術〉としての黒川能 民俗芸能をめぐる思想と運動」

藤田智博（大阪大学大学院人間科学研究科）「グローバル化と文化再考 グローバル化は文化を「喪失」させるのか？」

[セッション4：全体討論]

まとめと挨拶 富山一郎（大阪大学）

【3-3. シンポジウム・講演等】

第一回：2008年3月9日

記録映画『地下広場』上映会＋講演会

上映作品：大内田圭哉監督／1970年製作／モノクロ／84min.／16mm

講演：ゲスト 毛利嘉孝（東京藝術大学准教授）

主催：大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学」

担当 上地美和（当プロジェクト／リサーチ・アシスタント）

田中葉穂子（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

第二回：2008年7月11日

大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学」レクチャー

「メディアのオルタナティヴ」 フランコ・ベラルディ（ピフォ）

主催：大阪大学グローバルCOEプログラム「文化芸術の公共性と社会的コンフリクトの研究」

「横断するポピュラー・カルチャー」、NPO法人 記録と表現とメディアのための組織 [remo]

協力：大阪市立大学都市研究プラザ

企画：吉澤弥生（大阪大学GC0E特任研究員）

第三回：2008年9月19日

ワークショップ/討議「文化における違法と表現の自由」

第一部：提起：小倉利丸（富山大学）

第二部：映像上映：『Freedom+Media 自由のメディア』製作：久保田美生（GC0E特任助教）

第四回：2008年11月1日

公開研究会「芸術と社会（学）」

石松紀子（九州大学大学院生／福岡アジア美術館コーディネーター）

「80年代イギリスの展覧会にみるアフロ・アジア系アート」

福井令恵（九州大学大学院生／立命館アジア太平洋大学非常勤講師）

「北アイルランドの壁画と紛争経験 壁画のある場から考える」

毛利嘉孝（東京藝術大学准教授）

「第三次世界大戦下の芸術 北九州国際ビエンナーレを手がかりに批判的な芸術形式を考える」

コメンテーター：水嶋一憲（大阪産業大学教授）

進行：吉澤弥生（大阪大学グローバルCOE特任研究員）

主催：大阪大学グローバルCOEプログラム「文化芸術の公共性と社会的コンフリクトの研究」 「横断するポピュラー・カルチャー」

第五回：2008年11月28日

参加型公開研究イベント「共有の空間をつくる実験〜「ちっちゃい火」を囲む」

一部：美術家・小山田徹さんに「共有空間」の活動を聞く（レクチャー）

二部：共有空間の実験　ちっちゃい火を囲む

主催：「ちっちゃい火」実行メンバー

大阪大学グローバルCOEプログラム「横断するポピュラー・カルチャー」

共催：大阪大学文学研究科メディアラボ

企画：久保田美生（GCOE 特任助教）

第六回：2009年2月17日

研究ワークショップ「ポピュラーカルチャーのなかのオウム真理教／事件と宗教研究」

講師：川村 邦光（大阪大学大学院文学研究科教授）

コメンテータ：渡邊 太（大阪大学大学院人間科学研究科助教）

主催：大阪大学グローバルCOE プログラム「横断するポピュラー・カルチャー」

大阪大学大学院文学研究科国際現代文化研究ハブ

企画：永岡 崇（文学研究科博士後期課程）

第七回：2009年2月20日

コンフリクトの人文科学セミナー

「日本の大衆文化と在日コリアン 〜芸能・大衆文学・スポーツ界を中心に」

講師：朴 一（パク イル）大阪市立大学経済学研究科教授

主催：大阪大学グローバル COEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」

共催：「横断するポピュラーカルチャー」研究プロジェクト、大阪大学文学研究科国際現代文化研究ハブ

企画：古川岳志（GCOE 特任助教）

【3-4. 「国際現代文化研究ハブ」との共同開催事業】

国際現代文化研究ハブは2007年度まで活動していた大阪大学21世紀COEプロジェクト「インターフェイスの人文科学/イメージとしての<日本>」班の研究成果として発足した研究交流拠点である。文化研究にまつわる様々な知的実践を交差させることを主眼とし、「横断するポピュラーカルチャー」と密に連携しながら、学内外をつなぐ「ハブ」機能としての充実を目指している。

第一回：2008年7月18日（金）

講演会「メディア論の視点 「絵はがき」と「新聞錦絵」を事例にして」

講演者 佐藤健二氏（東京大学教授・歴史社会学）

主催 国際現代文化研究ハブ 〔文化／批評〕編集委員会

共催 大阪大学文学研究科日本学研究室（兼 cultures/critiques 第 36 回研究会）

協力 「コンフリクトの人文学」横断するポピュラーカルチャー

第二回：2008年8月6日（水）

第一回日本学方法論の会 研究会「生命・身体と先端科学技術」

報告者：島蘭進（東京大学）「慎重論の論拠を求めて」

荻野美穂（大阪大学）「代理出産の意味するもの」

コメンテータ：永岡崇（大阪大学大学院文学研究科大学院生）

主催 大阪大学文学研究科日本学研究室／国際現代文化研究ハブ

第三回：2009年1月22日（木）

映画「レインボー Rainbow」を観る

上映作品：パレスチナ／41分／2004年／監督：アブドゥッサラーム・シャハダ

コメント：岡真理（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

主催：Rainbow上映実行委員会

共催：大阪大学文学研究科日本学研究室（富山ゼミ火曜会）国際現代文化研究ハブ

企画：西田優子（大阪大学文学部メディアラボ）

【3-5. 研究会・読書会】

第一回：4/30 プレ研究会 方針検討会

第二回：6/16 『ポストユートピアの人類学』読書会 担当 永岡崇

第三回：6/30 『ポストユートピアの人類学』読書会

第四回：7/14 「佐藤健二氏とビジュアル史料」研究会 担当 澤田正太郎

第五回：7/15 研究会プレ研究会 担当 永岡崇

第六回：8/21 『ポストユートピアの人類学』読書会 担当 真鍋昌賢（上田論文）

第七回：9/4 中間検討会

第八回：9/19 中間検討会

第九回：10/6 『ポストユートピアの人類学』読書会 担当 宇都宮めぐみ（佐々木論文）

第十回：10/17 「安丸良夫について」研究会 担当 永岡崇

第十回：11/12 『ポストユートピアの人類学』書評会 担当 古川岳志

【4. 2008年度活動業績（抜粋）】

■富山一郎

単著：

・『暴力の予感』（ハングル）グリーンビー出版（韓国・ソウル）、2009

共編著：

（田沼幸子、石塚道子氏と）『ポスト・ユートピアの人類学』（共編・石塚道子、田沼幸子と）

人文書院、2008

・「基地と振興の中で抵抗運動を再考するために」『インパクション』163号、2008、20-29頁

「『「原爆の絵」と出会う』からの始まりー特集について」『日本学報』27号、2008、1-18頁

「再び奴隷になるー沖縄人プロレタリアートとはだれのことか」秋田茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア』大阪大学出版会、2008、166-190頁

「まだ始まっていないこと、あるいはノラの奇蹟について」荻野美穂編『性の分割線』青弓社、2009、275-306頁

「土着と流亡的邂逅」『台湾社会研究季刊』（台湾・台北）72期、2008年、12月、191-203頁

・座談会：

「沖縄 10 年ー何がはじまっているのか」（阿部小涼、鳥山淳、新垣誠らと）『インパクション』168号、2008

■ 古川岳志（GC0E特任助教）

論文：

古川岳志、「書評：石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』」『日本学報』28号、2009.3

講演その他：

古川岳志、「『迷惑な文化施設』としての公営ギャンブル場」コンフリクトの人文科学セミナー、2008.6.13

古川岳志、「公営ギャンブルの社会学：競馬・競艇のポピュラーカルチャー研究」聖トマス大学尼崎学講座第5回、2008.10.28

■ 久保田美生（GC0E 特任助教）

口頭発表：

2008年3月8日 久保田美生「大学と『その外部』のコラボレーションから何をつくるか」研究ワークショップ「横断するポピュラーカルチャー」ーポピュラーカルチャーとコンフリクトー

企画制作：

2008年11月28日 公開研究イベント「共有の空間をつくる実験ー「ちっちゃい火」を囲む」

作品：

「Freedom+Media 自由のメディア」ケーブルテレビ J-COM ネット『コネクタテレビ』番組枠（2008年9月前半放映分）

2008年9月19日 ワークショップ/討議「文化における違法と表現の自由」にて同作品上映

■ 真鍋昌賢（大阪大学文学研究科助教）

論文：

2008年7月 「人はいかにして〈客〉になるのかー芸能の受容史のための覚え書き」『日本文化の人類学／異文化の民俗学』（小松和彦還暦記念刊行会編）法蔵館、450-468頁

2008年8月 「漫談とは何かー口承文芸研究の新たな課題としてー」『国文学 解釈と鑑賞』73-8、87-93頁

2008年12月「演者紹介」「演目紹介」『師走浪曲名人会』（国立文楽劇場営業部編）独立行政法人日本芸術文化振興会、1-3頁

2009年2月「戦時下で錬磨された声」『伝え』44号（口承文芸学会会報）、口承文芸学会、1頁

2009年3月「ポップな〈日本〉についての断想— 自画像を見つめ直すために— 」『子どもの文化』41-3、2-7頁

口頭発表：

2008年3月8日 「客はいかにして可視化できるのか— 芸能の受容史・試論— 」研究ワークショップ「横断するポピュラーカルチャー」—ポピュラーカルチャーとコンフリクト—

セッション1 対象としてのポピュラーカルチャー：ポピュラーカルチャーと学問が会うとき」於大阪大学

2008年10月25日「戦時下に響く七色の声— 浪花節における二代目天中軒雲月の位置づけ— 」第56回日本口承文芸学会例会シンポジウム（於國學院大学）」

■渡邊太（大阪大学人間科学研究科助教）

著書：

櫻井義秀編、『カルトとスピリチュアリティ—現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房、2009. 1.（共著）

論文：

渡邊太、「グローバルな運動におけるユーモアの潮流—テロリズム・粛清・ルサンチマンを回避しつつ」『笑いの科学』1号、pp. 96-103、2008. 5.

櫻田和也・吉澤弥生・渡邊太、「大阪市『新世界アーツパーク』にみる文化政策の課題—文化と公共性の現場」『文化政策研究』1号、pp. 46-59、2008. 6.

渡邊太、「バランス仮説と主観の一致—生活空間にはたらく諸力」『ソシオロジ』163号、pp. 21-37、2008. 10.

口頭発表：

渡邊太、「フリッツ・ハイダーの人間像」日本社会心理学会第49回大会ワークショップ「社会心理学のパイオニアを温めて」、2008. 11.

渡邊太、「カルト信者とひきこもりへの介入—生存と承認をめぐる—」日本社会学会第81回大会、2008. 11.

渡邊太、「書評：金友子『歩きながら問う』（インパクト出版会）」社会運動研究会、2008. 11.

渡邊太、「横断するポピュラーカルト—スピリチュアル理性批判」横断するポピュラーカルチャー第2回研究ワークショップ、2009. 3.

講演その他：

渡邊太、「意味喪失の時代を生きる—若者とカルト宗教」吹田市浜屋敷文化教養講座、2009. 1.

渡邊太・高橋淳敏ほか、「プレ・ニートピア—働かざるもの、働くべからず」カフェコモンズ、2009. 2.

川村邦光・渡邊太、「ポピュラーカルチャーのなかのオウム真理教／事件と宗教研究」大阪大学C0Eプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」研究ワークショップ、2009. 2.

■太田 健二（大阪大学大学院人間科学研究科特任助教）

論文：

2009年3月

「クラブカルチャーの文化社会的考察—メディア利用と空間利用という観点から」

（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第35巻）

学会発表：

2008年11月

「クラブカルチャーの文化社会的考察—小規模なクラブイベントにみる空間利用」

（第81回日本社会学会大会、於東北大学）

■東園子（2008年度RA）

論文：

2008年3月「バンコクにおける日本のポピュラーカルチャー受容」「東アジアの生活文化とジェンダー」研究会編『二〇〇七年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書 東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ』 P. 17-28

2008年5月「少女から女王へ ——宝塚歌劇『ベルサイユのばら』と女性の男性性」—柳廣孝・吉田司雄編『ナイトメア叢書第6巻 女は変身する』青弓社 P. 92-105

2009年3月「「宝塚」というメディアの構造 ——タカラジェンヌの四層構造と物語消費」青弓社編集部編『宝塚という装置』青弓社 P. 14-36

2009年3月「女性のホモソーシャルな欲望の行方 ——二次創作「やおい」についての一考察」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学 ——記憶・メディア・身体』文理閣 P. 263-280

■永岡崇（大阪大学文学研究科博士後期課程）

論文：

「飯降伊蔵と「おさしづ」の場—「親神」共同体の危機と再構築」『宗教研究』（日本宗教学会）356号、2008年、pp. 143-166

「協働表象のためのノート——教祖をめぐる読みの共同体を意識化する」平成 18-20 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「新宗教教祖伝の成立と構造に関する比較研究」（研究代表者—宮本要太郎）研究成果報告書、印刷中

口頭発表：

「「聖戦」とひのきしん——天理教のアジア・太平洋戦争」東アジア宗教文化学会、東義大学校、8月

「戦争の痕跡と信仰——天理教のひのきしんをめぐる」日本宗教学会、筑波大学、9月

「宗教経験としての戦争協力——〈ひのきしん〉の歴史」「民衆宗教」研究会、金光教大阪教会、10月

「民衆宗教論はまだ使えるのか」日本思想史研究会、立命館大学、11月

「協働表象のために——教祖をめぐる読みの共同体を意識化する」宗教社会学の会、関西学院大学、12月

■久保田裕之（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

論文：

2009年4月『『家族の多様化』論再考—家族概念の再分節化にむけて』『家族社会学年報』21(1)（査読あり）

共著・編著：

2008年8月「Squat the World!—拡大する居住運動と地域住民との共犯関係」酒井隆史ほか編『VOL』3:197-201、以文社

2009年3月「論点 23 結婚の類型」「論点 53 フェミニズムと家族」野々山久也編『論点ハンドブック 家族社会学』p109-112, p251-254 世界思想社

学会発表：

2008年11月23日第81回日本社会学会大会：一般報告「Amsterdamにおけるスクワッティング居住に関する調査—居住・生活・芸術運動という視点から」東北大学

2009年4月18日（年度では2009年度）第4回フェミニスト経済学会大会：自由報告「非家族家計の社会経済分析」法政大学

